川柳や狂句に見えた
外来語

66
258ほ

始

66
258

31.10.10

コ 79

川柳や狂句に見えた外來語

大正
13. 9. 9
内交

自序

言語の研究は實に興味ある學問の一つである、予は其興味に唆られて、多年俗語の研究に從事して居るが、言語學に於て云ふが如く、言語は其國の狀態を代表するもの、一言一語にも由來あり變遷ありで、其國狀の如何を察し其民性の如何を察し得られる

今は英語の流行で、童嬰までが英語をまねんで居るが、江戸時代にはポルトガル語、スペイン語等が當時のハイカラー語であつた其ハイカラー語を取入れた作句集の本書、これを大きく云へば、日本外交史の補助錄である

然し、其作句が甚だ少い、少い理由は、德川幕府が吉利支丹を畏れて國禁とし、阿蘭陀通商船の外は入國を許さず、外國語の研究をも許さなかッた時代で、僅に殘る足利末期以來の通語ばかり、

（其通語の過半は後に日本語化した）であッた故である
そして其通語の少かッた事、十中の九までがポルトガル語であッた事などが、即ち日本の歴史で、當時の國狀を語り民性を語る興味の存する問題であらう

大正十三年七月、半狂堂に於て廢姓外骨記す

例言

○外來語といへば、朝鮮、支那、印度等より來た語も其中に含まれるのであるが、それではアマリ廣汎に過ぎるから、横文字の國より來た語の入つた句ばかりを集めたのである

○横文字の國と云つても、ヱゲレス、ドイチ、フランスなどから來た語は一つもない、十中の九までは、早く我國へ來たポルトガル（葡萄牙）人の語で、殘る一分がスペイン語オランダ語である

○カナリヤ、パン、カンテラ、ジャガタラ、ヘイサラバサラ、カベチョロ、サフラン、テレメン、フクリン等も外來語であるが、其語の入つた句を見出さなかッたから載せない

○合羽（カッパ）、襦袢（ジバン）、更紗（サラサ）、羅紗（ラシヤ）、嗽叭（ラッパ）等は外來語であり、句も多くあるが、日本語化して居て面白くないから止めた

○『川柳や狂句に見えた外來語』といふのではあるが、川柳に近い
誹諧の句は採つてある、又小泉迂外先生の舊稿『古俳書に現はれ
たる外來語』といふのを附錄として掲出してある、これは奥平武
彦學士の忠告によつて得た好材料である
○狂句集の本は凡そ三百冊ほど持つて居るが、一々檢閲のヒマが
なく、又其得る所は費す所を償はない不經濟の事であるから、十
中の一二を披見したに過ぎない、助手とても編者と同じく、それ
〳〵やるべき要件があつて働いて居るのである
○出來上つて見れば、ツマラナイものゝやうだが、文化頃の『夢
之代』に「西洋人は小麥を以て常食とす、いはゆる麥團子なり」と
いふ奇文句があるので、パンといふ語の入つた句を探して徒勞に
歸したなど、讀者には知れない苦心と勞力はしたものである

目次

緒言……一
(一)オランダ……二
(二)ムスコビヤ……八
(三)エゲレス……九
(四)キリシタン……一〇
(五)バテレン……一三
(六)カピタン……一五
(七)ビイドロ……一六
(八)フラスコ……一九
(九)コツプ……二〇
(一〇)チヤルメラ……二一
(一一)カルタ……二二
(一二)シヤボン……二四
(一三)エレキテル……二六
(一四)ビロウド……三〇
(一五)インデヤ……三一
(一六)サントメ……三二
(一七)フクリン……三三
(一八)メリヤス……三四
(一九)カボチヤ……三八
(二〇)サボテン……三九
(二一)ズボウトウ……四〇

(二二)ウニコウル……四一　スルトヘル
(二三)テンプラ……四四　スルトマル
(二四)アルヘイ……四八　オナラスウ
(二五)カステイラ……五〇　古俳書に現はれたる外來語……六七
(二六)ミイラ……五二
(二七)アンポンタン……五五
(二八)タバコ……五六
(附錄)
外來語擬似狂句……六五
アリンス國
フルトキル
ネルトスル

川柳や狂句に見えた外來語

編纂者　廢姓外骨

緒言

言語研究、風俗研究の一つとして、近頃古い誹句や川柳、狂句を整理して居るが、其事業の主要は多數の句を分類するにあるので題材上の分類、形式上の分類、此三大區別に又各數種の細目を設けて居る、本書は其言語上の一種たる外來語入りの句に、語原語義を附けたものである、然し「タバコ」の如き世界共通語は例外として、外來語といふも、事實は外國語の轉訛で、我國だけでしか通じない曖昧語、半外來語が多いと諒したまへ

【一】オランダ

「オランダ」を漢字にて阿蘭陀、和蘭、荷蘭、法蘭得亜などと書くが、それは漢字のアテ書き、本音は「ホーランダ」である、又「紅毛」と書いて「オランダ」と讀んだが、これは其國人の毛髪が紅(あか)いとの義に據る、歐羅巴西北部の小國、德川幕府時代に通商を許し入府を許して居たのは此「オランダ」國だけであつた、長崎の出島に阿蘭陀屋敷といふ居留地があり、「傾城の外、女入るべからず」で丸山の遊廓に居る娼妓だけが出入を許された、それで「丸山の客は一萬三千里」といふ柳句もある、司馬江漢の『西遊旅譚』には「日本長崎より阿蘭陀まで日本里數にて一萬三千里といふ、さしわたしにはかるときは二千四五百里に過ぎず」とある

腹が丸山阿蘭陀をはらんだの　天保五年の『梅柳』

これは丸山の遊女が阿蘭陀人の胤を宿すといふ狂句である、「丸山」の遊女と蘭人との關係句は『川柳語彙』の五十二頁に數多く列記し、其中の「丸山で踵の無いも稀に產み」も右の類句である

享保七年の八文字屋本『千代袖算盤』に長崎商館の店前で遊女が蘭人に「らごとんさん久しいぞへ」とある、其關係察知の料

寶暦十一年の『燕都枝折』五篇には「丸山や女によめぬ文が來る」といふ句がある、ABCの横文字なるが故にいふ、此文字につき

どう見ても紅毛(オランダ)文字はちゞれッ毛　天保頃の『柳の葉末』

紅毛と梵字のあひを下女の文　天保三年の『芽出し柳』

紅毛の字を涎にて牛はかき　『柳樽』の第八十二篇

「三味線の絲紅毛の文字に切れ」といふ横文字草書の形容句もある

阿蘭陀人は通商を許されて居るお禮として毎年德川幕府へ土產物を持ッて挨拶に出る事になつて居た、又何かの交渉事があれば蘭人に出府を命じたのである、其長崎から江戸へ登る途中

阿蘭陀が唇うすき富士の山　享保五年の『鐵割』

「見て通りけり〳〵」の前句、名山讃美の事

紅毛（オランダ）の唇うごくさよの山　寶暦四年の『誹諧金砂子』

夜泣石の傳說を通辭から聽いての應酬であらう

いよ〳〵江戸へ着すれば、本石町三丁目の長崎屋源右衞門といふ定宿に泊らねばならぬのであつた

紅毛やおのが巢となる長崎屋　享保十八年の『江戸名物鹿子』

紅毛の眼の覺やすき鐘の聲　安永元年の『武玉川』十七篇

時刻を報ずる撞鐘が同町內にあつた事「石町の鐘は紅毛まで聞こ

紅毛雜話

え」といふ駄句もある

紅毛の登城に蠅の付て來て

一種の臭氣を放つ外人と見ての句であらう

なつかしや阿蘭陀人見てなげく象　元文五年の京版『誹諧田植笠』

享保十三年に交趾國から日本へ大象が渡り來て都鄙の大評判に成り、元文後の寛延頃まで生存して居たので、諸外國を南蠻と稱し阿蘭陀も其南蠻の一、象が故國の人と見て歸心勃々であらうと見ての句である

紅毛の家鴨爪先ねろふなり　『柳樽』の三十八篇

これは駄狂句、紅毛人は踵が無いから靴で踵を拵へて居るものと見、アヒルは人のカヾトを狙ふもの、紅毛人には其踵が無いから爪先を狙ふであらうとのクダラヌ言草

夜這に立ッて行きし阿蘭陀　寛保二年の『誹諧心の種』

阿蘭陀人は腰を折ることなく、家中に居るも沓をぬがずであるから、四ッ這でなく、常態の歩行であらうとの事

西鶴の誹句集『三鐵輪』に「阿蘭陀流といへる誹諧は、其姿すぐれてけたかく、心ふかく詞新しく」云々とある、延寶の頃、上方でソンナ誹諧が流行したものか、同『三鐵輪』及び有名な『大矢數』などに見える短句が、其一部分であらうか

こと問はん阿蘭陀廣き都鳥　阿蘭陀漬の風薫り行

阿蘭陀流の行方の風　紅毛よりも紙幟賣

一座をいたす阿蘭陀が宿

これが阿蘭陀流の阿蘭陀誹句か否かは知らぬが、當時紅毛燒、阿蘭陀鷺、阿蘭陀草など阿蘭陀物が流行した事は確實である

【二】ムスコビヤ

阿蘭陀人が今の露西亞のモスコー「莫斯哥比亞（モスコビヤ）」を「ムスコビヤ」と呼び、それを露全國の代名詞に使つて居たのである、『西域物語』には「ロシヤ（モスコビヤをいふ）日本の東蝦夷の屬島をモスコビヤに奪取られたるに日本にては夢にも知らず」とある、『通航一覽』には「ヲロシヤ國の府はムスクバといふ」とある　享和元年の『諸蕃五萬歳』

今も猶國爭ひのムスコビヤ

アレキサンダー前の露帝ポールが佛軍や墺軍と戰爭して居るとの傳聞を句にしたのであらう　天保六年の『梅柳』九篇

ムスコヒヤみなとら者と知つたふり

山東京傳作の蒟蒻本『息子部屋』は「ムスコビヤ」に擬した書名であつて、其息子が遊里耽溺の蕩樂者であるので、露國の代名詞たる「ムスコビヤ」といふを聞いて、それは皆「ごら者」であると牢可通がいふとの義である

又モスコー產の皮革を阿蘭陀人が「ムスコビヤ」と稱して盛んに輸入したので、「ムスコビヤ」を革の名としても呼んだ、其革はインデン革に似て縮文のある物であつた、江戸の通人は其革で造つた巾着や胴亂を携帶して誇つたのである

【三】ヱゲレス

イギリス、英國のこと、『通航一覽』などにも、トロコ國、ドイチ國、エゲレス國と記せり、葡萄牙語「インゲレス」の轉訛である

黑船はるげれす船のあひ近み　慶安元年の貞室正章千句』

【四】 キリシタン

「キリシタン」とは葡萄牙(ポルトガル)語、キリスト教(天主教)のことである、天文十七年に葡萄牙人が初めて我國に宣傳したもので、爾來信徒が多く出來、織田信長時代の永祿十一年には京都に南蠻寺といふ教會を建てたほどだが、十八年後の天正十三年に豊臣秀吉のため邪教と認められて其寺は毀たれ、布教も信仰も禁止され、德川時代の慶長末年、寛永の初頃、幕府の鎖國主義と共に絶對嚴禁の方針で、外來の傳道師と多數の信者は大迫害を加へられた、其委細は『日本西教史』(佛國クラセ著、日本太政官飜譯)に記してある、近刊の吉野作造先生著『新井白石とヨワン、シローテ』、山本秀煌子著『江戸切支丹屋敷の史蹟』なども、其迫害史の一部分である

「キリシタン」を漢字では「吉利支丹」と書いた

偽のなき世なりせば吉利支丹　延寶八年の西鶴『大矢數』

キリシタン攻撃の句である、此「吉利支丹」の字、天和元年に將軍と成つた德川綱吉の「吉」字に憚れとて、「切死丹」と改められた、『五月雨抄』には「切死丹は調伏の意なり、公儀に是を用ゆ」とある、斬り殺せの義であるとの事

きり〳〵と、文字あらたまる切死丹　元祿十五年の『若ゑびす』

むかしは吉利支丹と書てきりしたんとよみたり、當代あらたまりて切死丹と書ゆへに、きり〳〵との笠を吉利切と付けたるなり

との說明附きである、此「切死丹」は幕府の公文書にも記した字であつたが、アマリに酷であると氣付いたものか、後には公私とも

に「切支丹」と書く事になッた

毒薬の名と知るがよし切支丹　延享頃の句と『時代狂句選』にあり

邪教説に雷同した句である、西原柳雨子の『川柳九州志』に「敵味方切支丹坂茗荷谷(天保句)此句は天草勢(切支丹軍)鍋島勢(定紋茗荷)とに擬して江戸小石川の切支丹坂と茗荷谷とを敵味方と云つた狂句に過ぎぬ」とある、此「キリシタン」を「耶蘇教」とも稱した、「救主、キリスト」に據る「イエス」教の義、「神鏡の威德に耶蘇はうつりかね」の句もある

此邪教視せられた「切支丹」も、德川幕府倒れて新政府となつた明治二年の三月、公議所で信者に對する制裁法を二百餘名の議員連が寄つて評議したを始めとして、後には布教傳道信心渇仰も許され『帝國憲法』にも「信教ノ自由ヲ有ス」と成つたのである

【五】　バテレン　イルマン

「バテレン」とは葡萄牙語の「バテレ」で、宣教の師父といふ義である、漢字で「伴天連」と書いた「連」を「連」と讀んだが通語に成つたのである、

寛文五年
吉利支丹退治物語

「イルマン」とは同じ葡語の「イルマン」で兄弟の義、漢字で「伊留滿」『印留幔』又は「由婁漫」と書いた

新井白石の『西洋紀聞』には「パアテレ(漢には巴禮と譯す、我俗には バテレン ともバテレンともいふはこれなり)イルマンなどい

ふは、其位號にはあらず、ヱウロバのことばに、父をバアテレといひ、母をマアテレといひ、兄弟をイルマンといふ、されば我たつとぶものは、バアテレともいひ、我したしきものをばイルマンともいふ也」とある、要するに今の宣教師をバテレンと稱し、傳道師をイルマンと呼んだのである

享和元年の大江丸『誹諧袋』

バテレンの本尊かけたか杜鵑
夷の三味のバテレンと鳴る

誹諧鶴の二十一篇

いづれも狂句體の句である

元祿十五年の『若えびす』

すゝめこむいるまの祖師は繪踏の繪

「いるま」はイルマンの略、「祖師」とは教祖、「繪踏」とは宗門檢察の手段とした「踏繪」のこと、其踏繪にキリストの十字架像があつた事をいふ、『武玉川』に「洗ふても繪踏の足の氣にかゝり」

【六】カピタン

葡萄牙語、船長の義である、漢字では加比丹、又は甲比丹と書く、太田南畝の『瓊浦雜綴』には「紅毛加比丹の狎妓(長崎丸山の遊女)の衣裳には、必ず關羽周倉を縫物にすといふ」又「阿蘭陀の加比丹此度(文化元年三月)魯西亞船出帆の翌々日、阿蘭陀通詞を招き阿蘭陀人は阿蘭陀料理の卓、日本人へは日本料理にて大饗せしといふ」とあり、尙加比丹が遊女二十人ばかりを招き、裸體踊りをやらせた事を記してある、日本が露國との交易を拒絶した祝ひであつたと云ふが、何にしても贅を盡したものらしい

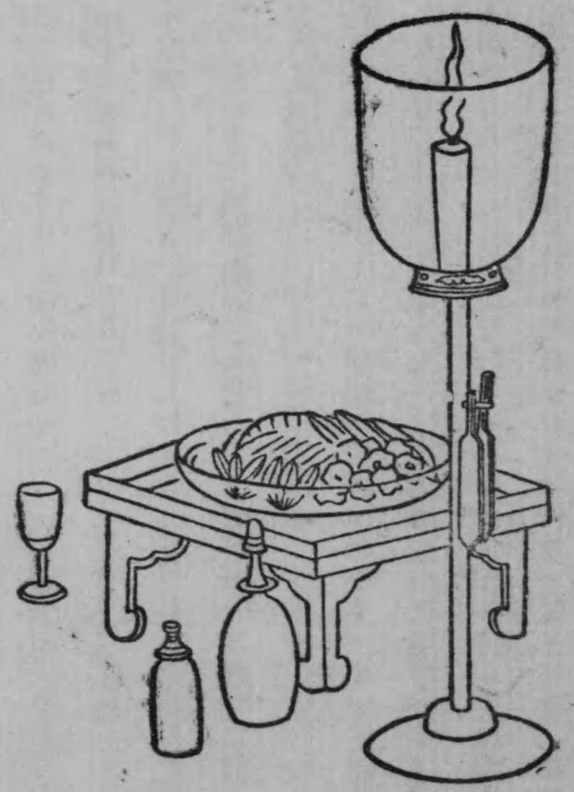
享保の句と『時代狂句選』にあり

五月雨やかぴたん國を思ひ遣る
徽たんとの駄洒落か、阿蘭陀には梅雨期の無い事を知らない句

【七】 ビイドロ

これは今もいふ「ガラス」硝子の總名である、此「ビイドロ」の語原には種々の說もあるが「ビイドロは蘭語にあらず、ホルトガル辭なり」と『武江年表』にもあつて、蘭語たる事だけは確であらう古い和語では此ビイドロ玉を「ふきだま」吹いて造る玉と云つた、延喜式にも出て居る、又此ビイドロ玉は本邦の上代にも行はれたと見え、いつぞや安閑天皇の御陵からガラス玉の出た事がある、「藥玉」といふのも此硝子玉の事、藥で製する玉の義である、貞德の誹句に「氷とくればびいどろながし哉」といふのは、硝子の粉を七寶流しにした物であらうと柳亭種彥が云つて居る

びいどろの盃わるとまどわせる　『柳樽』八篇



ビイドロ　フラスコ　コップ

びいどろのかんざし村の派手娘
みりん酒を入れてびいどろすゝぐ也　「柳樽」十六篇

びいどろの中でおよぐを猫ねらい　同三十一篇

ビイドロのかけ拾つても〳〵　「誹諧鵆」三十一篇

右の第二句は、雛祭りの白酒を入れた瓶の事である、明和七年の『象の鼻』にある「夢の世の息に實のなる硝子師」は吹いて稼業にするとの義であらう

又美人を形容して「ビイドロを逆さに釣つたやう」といふ俚諺が行はれたので「ビイドロ」を美人の代名詞に使つた狂句が多い、「びいどろのやうだから母あぶながり」、「びいどろを釣るすに支度金を出し」、「びいどろを貰つて息子だゝがやみ」などの類、「あたらしいびいどろを割る果報者」といふやうなバレの駄狂句も多い

【八】フラスコ

ガラス、ギヤマンとも稱した硝子で製した瓶を葡萄牙語で「フラスコ」と云つたのである、『和漢三才圖會』には『布羅須古』と書いて酒を盛る缶の蠻語と記してある

フラスコにおもとの珊瑚珠いけて見る　寛延頃の『誹諧御代錦』

フラスコやあけゆく跡の酒そへて　同書

ふらそこはちびり〳〵と青く成り　寛政元年の『柳樽』二十三篇

ふらそこに淫の壽命のすき通り　同九年の同五十九篇

「顏赤くなるとふらそこ青く成り」といふ文政頃の狂句もある、此フラスコといふのは無色透明のものでなく、淡綠色の硝子製であつた事が右の句で知れる

【九】コップ

これも葡語の「コポ」の轉訛で、酒盃をいふ、ポルトガル人が來た足利時代末期頃からの語であらう

御妾はこつぷですういゝ〳〵と呑み　『古今前句集』三篇

水鉢の中でこつぷの立およぎ　文政句『時代狂句選』

こつぷに鼻のさはる泡盛　『誹諧金砂子』上篇

又「うんすんカルタ」の五種の一、丸形の模樣に附いて居る札をも「こッぷ」と稱した、一より九までの數札と、ウン、スン、ソウタロハイ、コシ、馬の繪が附いた六枚、合計十五枚である、丸形は酒盃の模樣であらう、其札「コップのコシ」と「コップの三」との圖は後の頁の「カルタ」の條に摸出してある

【一〇】チャルメラ

これも葡萄牙語の「チャラメラ」の轉訛であるといふ、支那では哨吶、又は太平簫と書き、樂器の一たるラッパ笛の類に屬する物、「吹き降りにチャルメロに成るけちな傘」といふ句がある、傘が逆にすぼまッたやうな形であるに據る、「ラ」行の相通で「チャルメル」、「チャルメロ」とも稱した、『嬉遊笑覽』には「輕業の鳴物に用る銅角をいふ」とあり、『俚言集覽』には「浮言をチャラホラといふ、省きてホラを吹くともいへり、又クラボコといふを混じてチャラホコといふはいよ〳〵わからぬ言となれり」とある

ちやるめると赤熊を太刀で引擔ぎ　『柳樽』三十五篇

丸山の騷ぎちやるめろなども吹き　同

【一一】カルタ

これも亦葡語である、骨牌のこと、歌留多（カルタ）とも書く、此カルタの誹句柳句狂句は無量に多くあるが、それは悉く省いて、不可解の誹句ばかりを左に列記して置く

其恨みはかぞへ加留多の馬繋ぐ　西鶴「大矢數」

計へ加留多馬繋くなと話寄り　同

イヌぬく骨牌けふも暮しつ　元祿の「むつちどり」

右第一と二の句は「うんすんカルタ」の「計へ加留多」といふ事を知らぬから、隨つて「馬」札を繋ぐといふ事がわからぬ、第三句の、「イヌ」とは「劍札」のことであるが、それを抜くといふ方式が不明

左のカルタ繪は「コツブのコシ」と「コツブの三」

【二二】シャボン

葡萄牙語の「サボン」、西班牙語の「ジャボン」、此二語を混じた語であらう、石鹸と書く、古くは衣類の洗濯用であつた、入浴に用ゆるは徳川幕末の頃からであるらしい

「本草啓蒙――紅毛ノ語ニセップと云フ、羅甸語ニサボネートト云フ、此サボネーを轉ジ誤ッテシャボントト云フ、舶來多シ、物ヲ洗ヒテ油アカヲ落スモノ也、集解ノ説ニテハ、アクノヲリニウドンノ粉ヲマジヘタルモノ也、然レドモ蠻產ハ別ニ方アリト云フ、俗ニ油ヲ落スモノヲ皆シャボントト云フ、無患子ノ皮ヲモシャボントト云フ、コレモ油ヲ落スニ用フ、又白豆ヲ細末ニシテ澡豆ニ用フルユヱ、白豆ヲシャボン豆トモ云フ、又サボテントイフ草ハ秘傳花鏡ノ仙人掌ナリ、コレモ疊ニ油ノ付キタル時、此物ヲ横ニ切テ磨スレバ油ヲ吸取ルニ依テシャボントト云フヲ轉ジテ俗ニサボテントト云フ」（古事類苑）

『華夷通商考』には「サボンー暹羅土產、灰汁ヲ煉カタメタルモノ色白ク鹹シ、衣服ヲ洗フニ用ユ、能ク垢ヲ去ル」とある

奈良正倉院の御物中にシャボンがあり、慶長十七年の目錄にシャボンの語が見えるさうである、これは西班牙人か葡萄牙人が持來つて献上したものであらう

然し、此洗濯用入浴用のシャボンを詠んだ句は一つも見當らない皆『嬉遊笑覽』にある「今シャボントて無患子、芋がら、烟草莖などを燒きたる粉に漬し、竹の細き管（又は麥の莖）に其汁をつけて吹けば、玉飛で日に映じ、五色に光りて見ゆ」といふ小兒遊びのシ

ヤボン玉の句ばかりである、そして昔は其汁と管を賣つて歩いた專業者があつたので、それを詠んだ狂句が多い

しやぼん賣面目もなく吹歩き　しやぼんを蹴破る蜻蛉の勇

我顏の面目もなきしやぼん賣　泡で此世を過してるシヤボン賣

つらぬきとめぬ玉ぞ散るしやぼん賣

【一三】エレキテル

阿蘭陀語の「エレクトリシテイト」の轉訛で、電氣といふ事である我國へ電氣機を蘭人が持つて來たのは享保時代であつたが、切支丹魔法つかひの一種と見て顧みられなかッたのである、それを寶曆の頃平賀源内が物理學上のものと稱し、試驗的に器械を製作して彼是と苦心したのが、我國に於けるエレキテル行使の元祖であつたのである、其事は司馬江漢の『春波樓筆記』にも出て居る

「源内おらんだの奇物を好み……其後長崎へ行きけるに、昔し献上せしに不用とて返され(エレキテル器を)長崎へ持ち歸る、此物通詞の家に數年ありける故、くづれ損じ體なしに成りてありけるを、源内東都に持かへり、數日工夫をばめぐらし、竟に考へ究めたり、是今のエレキテルなり、大名小名これを見物す、爰に於て源内を奇人と稱す、然れども、只紙の動き飛ぶと、火氣の光り見ゆるのみにして、人の體へ動ずる事なし、彼ビイドロ壺もありけれど、何にする物と云ふ事を知らず、源内の死後、おらんだより渡り來りて、今(文化末年)は見世物に出だし、世俗の人も見る事とはなりぬ」

此エレキテルの事に關係ある奇怪の珍話が、大塚自庵の聞書とい

ふものに見えて居る

「蒲生家の家中に結解十郎兵衛といふ者あり、其者の向ふ脚より青き火出るを見し者多し、蒲生下野守殿の馬の沓を打つに、向ふ脚の間へ青き火チョロ〳〵と出るを見しといふ、其頃はこれを甚だ奇怪とせり、今は阿蘭陀より外療器の中に人身より火を取る事をなす道具を渡來す、名をエレキテルセリテイといふ故に珍らしからず、肉身或は血塊の所より火を取るは常の事なり、向ふ脚は骨のみの所なり、爰より火出るは必ず貧人の相といふ、然れば俗諺に乏人を指して向ふ脛に火出づといふこと據所あるに似たり」

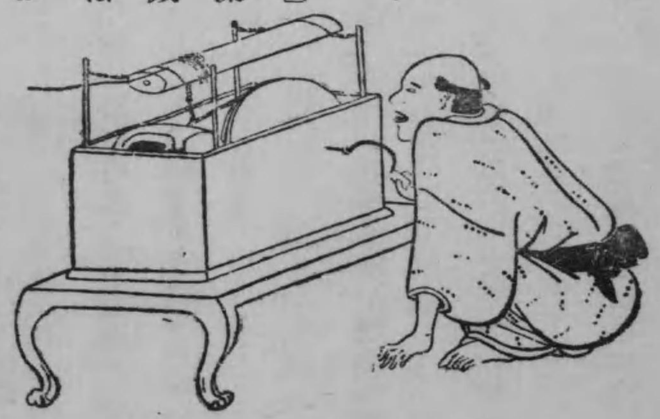
電氣器械を驚異とする喧傳に伴つて、アラヌ怪事を附會する者のあつた事が察せられる

さてエレキテルの句は多く見當らない、傳來が天明頃であるから、古い誹句などには一句もない

出來　文化四年『柳樽』卅九篇

天窓（あたま）こつきりお互にエレキテル　天保三年『武藏野六士撰』

エレキテル玉藻ノ前の後に



此第一句は謠曲『殺生石』の「玉藻の前が身より光りを放ちて清涼殿を照らし」云々による、第二句は接觸電氣「はち合せで眼から火が出る」といふ事である　天明七年森島中良著

【一四】ビロウド

天鵞絨、天鵞即ち鵠の羽毛で織つた物、森島中良の『紅毛雜話』には「びろうど」といふはマレイス國の語なり、紅毛にてはフルワエールといふと也、大槻玄澤子の物語なり」とある

天鵞絨の鼻緒をなめる赤い舌　文政の狂句

下駄の鼻緒が美人の股間から出る赤い舌の如き緋縮緬の腰卷に甜めるが如く擦られるとの事である

西鶴、友雪、蓼太等の誹諧にビロウドの句が多い、不可解の句もあるが、左に四句を擧げて置く

おり天鵞絨泊り客人下の下也　天鵞絨の蒲團に寢た事は今

天鵞絨に十年の工夫織おほせ　其時天鵞絨染も定まらず

【一五】インデヤ

印度國名、昔印度から輸入したサラサ染の革を「インデヤ」と呼んだのである、『安齋隨筆』に「印度は天竺國なり、インデアは西天竺なり、其國より渡る革なる故インデアの革と云ふなり、インデンと云ふは誤りなり」とあり、荻生徂徠の『南留別志』には「いんでんといふ皮は、應帝亞より出づ、ゐんでやとよむ、いにしへの印度なるべし」とある

其時のはなを印氏亞(インデヤ)かも知らず　『古今前句集』五篇

インデヤ革のサラサ染、明和天明頃には「古渡(こわた)り」と稱し溢味を好む通人が珍重し、巾着煙草入下駄の鼻緒などに用ゐたのであるが、此句は古渡りの美人として有名な玉藻の前の事であらう

【一六】サントメ

「棧留」とアテ字に書いて居るが、印度のサントメより輸入した織物、紺地に赤又草色などの縞ある物、今の「唐棧」に同じ、江戸時代には商家の小番頭丁稚などが多く此サントメ縞を仕着として貰つたのである

さんとめへ羽二重が來て手を合はせ　『古今前句集』

奸通か何か、此方の密事を嗅ぎ知つた雇人へ、奥様が其事を口外せぬやう賴む事である

棧留を着るもさかりの草履取　『武玉川』三篇

草履取の下人は大概メクラ縞の着物である、それがサントメ縞を着るのは全盛であるとの事

【一七】フクリン

ゴロフクリン(呉絽福林)と稱した阿蘭陀產の毛織物、グロフグレインの轉訛である

傾城にふくりんかけた御奉公　『柳樽』三十一篇

フクリンをかけるとは、着物の袖口にフクリンを附けることで、彌勝るの義にも使はれた、遊女以上の手練手管で殿樣を籠絡するお妾との義である

『半日閑話』安永五年の條に「阿蘭陀の福輪糖といへる菓子を賣る大に行はる、其樣すぼき竹の笠を着て、壺を二つ肩にかけたり、菓子は煎餅に胡麻を入れたるものにて、大きさは栗燒の如し」とあるフクリンに何等かの縁がある名稱らしい

【一八】 メリヤス

絹、麻、毛絲、綿絲等で編んだ伸縮自在の物、大小ともに寛狹なしとて「莫大小」と書いて「メリヤス」と讀ませた、又「目利安」とも書く、葡萄牙語では「メイアス」であり、西班牙語では「メジアス」である、此西語の轉訛であらう

今はメリヤスのシャツ、股引、腰卷、褌等もあるが、往昔初めて渡來した頃には、手袋と足袋ばかりであつたらしい

メリヤスをはいて蛤蜊踏れたり　延寶五年の西鶴『大矢數』

唐人の古里寒しめりやす足袋　延寶八年の自悅『洛陽集』

はき心よきメリヤスの足袋　元祿四年の几兆『猿蓑』

たくしこむ茶屋メリヤスの袋町　寛延三年の前句附『寶舟』

右四句は足袋の事であらうが、手袋としての句は寶曆以後に

メリヤスをはめるとつかむ眞似をする　搢を風伸

にぎ〳〵をしてめりやすを買つて居る　同

此二句は手袋の事に違ひないが、文化四年の『柳樽』三十七篇に

めりやすはいれど足袋屋はいらぬ所（とこ）　吉原の遊女

此句はメリヤスを手袋の代名詞に使つて居る、文化の頃にはメリヤスの足袋はすたれて手袋ばかりであつたらしい、『守貞漫稿』に據ると、天保の頃にはメリヤスの足袋はなくて手袋ばかり、其手袋を使用するのは武士階級の者ばかりであつたやうに記してあるそして文政の柳句に「めりやすの蚤をこらゆる馬の上」といふのがある、これはメリヤスの肌着らしいが、肌着シャツの類はマダ行はれてゐなかつた時代とすれば、手袋の蚤と解さねばならぬ

さて此「メリヤス」には第二義がある、既に『川柳語彙』にも記してある通り莫大小、長くも短くも唄ひ得る俗曲をメリヤスと稱した、『嬉遊笑覽』に「歌舞伎芝居のめりやすは江戸弄齋節の移りたるものか」とあり、『近世事物考』には長唄にメリヤス節のある事を記し、吉原遊女の清搔にもメリヤスありとの說がある

『柳樽』五篇から七十五篇迄の中にある「メリヤス」の句を左に列記

めりやすは女の愚痴に節をつけ　たやうなもの

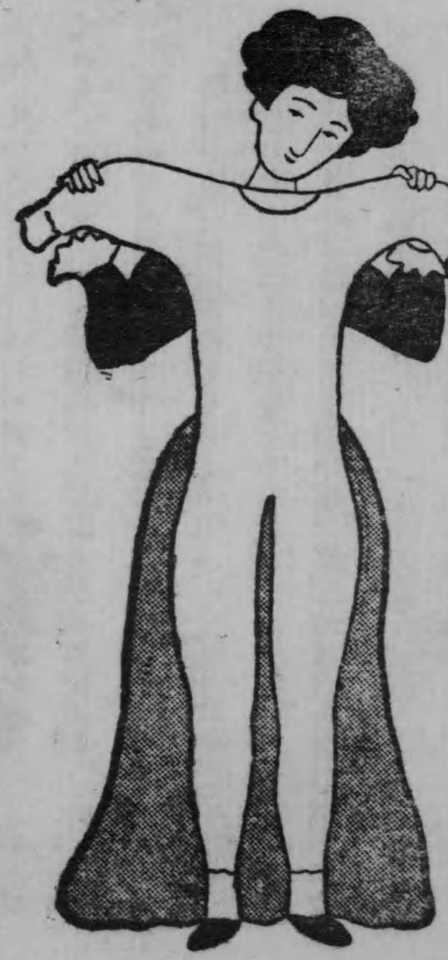
御親父へ其めりやすが聞かせたい　身代つぶしの聲

お妾の書物めりやすばかりなり　輸入の唄本

めりやすと御經の聲は大ちがひ　陰氣陽氣の差

蚊屋賣がめりやす程な節をつけ　初夏の行商

「めりやすが出ると柄杓で身振りをし」は梅ケ枝踊りの事であらう



ユニオンシャツの廣告繪

外國雜誌所載

【一九】カボチヤ

南瓜、唐茄子のこと、カンボヂア(東埔寨)國產の瓜なるが故の名である、カンボヂアは安南に接し暹羅の東南に在る國

風呂敷をとけばかぼちやと伯母の文　「古今前句集」

中たがひかぼちやの蔓をたぐるなり　「柳樽」三十五篇

かぼちやどろぼう雪隱を引きたをし　同　三十九篇

此第二句は隣からはびこッて來た蔓、第三句は田舍の野雪隱にはびこらせる南瓜を盜む事

妙味ではないが、『滑稽俳句集』に左の句がある

唐茄子と名にうたはれてゆがみけり　淑石

坐禪して南瓜の尻のくさりけり　紅綠

【二〇】サボテン

仙人掌、覇王樹、シャボテンともいふ、原產はメキシコの高原である、無葉有刺で扁平又は圓狀の綠色植物、我國でも古くから盆栽として弄ばれた、火災除の呪になるとの俗說もある

源左衛門さぼてんなどはとうに賣り　寶曆句『滑稽發句類聚集』

さぼてんは子供をみんな肩車　文化句『時代狂句選』

よつぼどのきげんさぼてん買てくる　「古今前句集」

さぼてんの親類書に麒麟角　天保の「芽出し柳」

右第一句は佐野常世の貧乏、第二句は比喩形容、第三句は平常何も買つて來た事のない亭主であらう、第四句は其形狀が似て居るとしての駄句

【二一】 ズボウトウ

甘草膏、去痰藥、阿蘭陀傳來「ドロップ、スートボート」の轉訛であるといふ、『日本外來語辭典』に左の如くある

「問て曰く、近來世間にズボウトフ、ズドフボフなど稱するものあり、これは如何なるものにや、答て曰く、これは本名ドロップ、スウトボウトといふ、又ドロップとのみも云ふなり、ズウトボウとは甘草の事なり、此もの甘草を煎じつめて膏となしたるものなり、スウトボウトをスボフトウと誤れるなり、痰飲諸症、凡て胸膈をゆるめる効あり」（蘭說辯惑）

寶曆後、江戸日本橋橘町に大阪屋平六、大平といふ藥種屋があつて此阿蘭陀傳法の「ズボウトウ」といふ藥を賣つて居た、原料は甘草を煮つめたもの、痰の妙藥として江戸名物の一つであつた

甘草が原料であるから咽喉がよく成るとの効能書もあつたらしい

平六が所づぼうとうよく賣れる　「柳樽」十一篇

これは大阪屋平六の店の近傍に「橘町の踊子」と呼ばれた藝妓の巢窟があつたので、其多くの藝妓が晝夜の繁昌で放歌のため咽喉を痛め、「ズボウトウ」を買つて呑むとの事である

【二二】 ウニコウル

葡萄牙語の「ウニコルネ」北極產の海獸「一角」の事である、其骨が諸病に効あり、特に疱瘡の解熱劑として珍重され、江戸麹町等の藥店では「一角丸」と稱して賣つて居た、『日本外來語辭典』に蘭說辯惑、瓊浦偶筆、紅毛談、外數書引用で詳記してある

長崎無名子の通告によれば、昔長崎ではウニコウルを煙草入や巾着の根付にして珍重した者もあつたと云ふ、

持參金うにこうる迄のんだつら　「柳樽」五篇

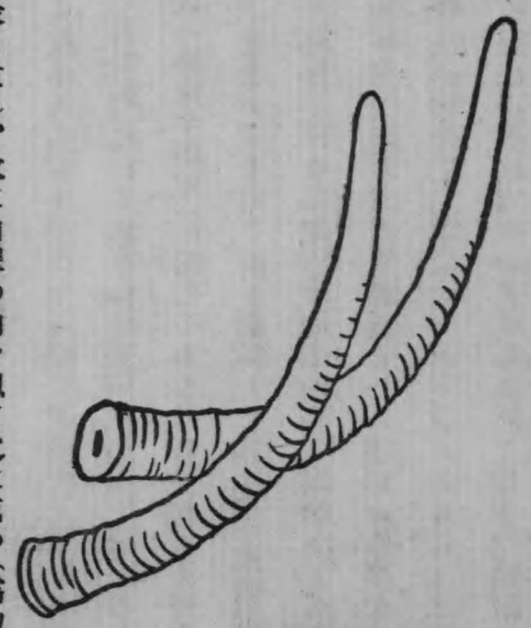
踊子のはなし大きなうにこうる　同　十四篇

此第一句は、疱瘡にかゝつてアバタ面になつた娘、貰人がないので持參金附で嫁入させたといふ事、第二句は、「一角丸」と稱しても、其原料はウニコウルでない僞物が多かつたので、ウソの代名詞になつて居たのに由る、此事は昔の隨筆本か戯作本で見たのであるが、今其典據を思ひ出せない

瘤一つひたいに有ればウニコウル　「誹諧金砂子」下

額にコブが一つ出來れば、一角であるといふまでの句であつて、深い意味はあるまい

△一角　うんかふる、はあた、共に蠻語なり、うんかふる、一角の二字を用ゆ、阿蘭陀の市舶、偶ま來て官物と成る、尋常得難し其長六七尺、周三四寸、色象牙に似て微黄、外面に筋あり竿麸の如し、末二三尺に至り細く尖りて筋も亦無し内に空穴あり、其穴徑四分許、價最も貴し、故に白犀の角を以て之に充つ（僞物）白犀の角は交趾より來る云々　原漢文（和漢三才圖會）



和漢三才圖繪

【二三】テンプラ

天竺浪人が大阪より江戸へぶらりとやつて來て、魚類に衣をかけた油揚を商ふので「天麩羅」といふ名を山東京傳が初めて付けたのであると、弟京山が『蜘蛛の絲卷』に記してあるのは、何人も否定する誤説であるが、編者の友人某これを辯護して曰く、「天麩羅」の三字はモト外來語にあてはめた文字であるから、漢語としても邦語としても意義不可解である、此天麩羅といふ語のある事を知つて居た京傳が、無學の利介(大阪人)に、天竺浪人のふらりと云ひ聞かせ、字義としては「天は天竺の天即ち揚げるなり、麩羅の麩は小麥の粉、羅はウスモノをかけると云ふ義」にも成ると滑稽的に説明したのは實に面白い解釋である、只京山が此「天麩羅」の語を亡兄の創意に歸したのが大味噌の謬見であると

明治十年三月發行の『花月新誌』に信夫恕軒の天麩羅ノ説といふのを載せてある、其一節に(原漢文)

「適ま黄一正事物紺珠を繙く、蠻食部に塔不剌の目あり、曰く葱椒油醬を用て煮熱し、後鴨或は鶩鷄を下し、慢火養熟すと、乃ち知る唐山も亦此物あるを、而て我所謂天麩羅なる者、蓋し塔不剌の誤ならん、或は好事の者、其字面の雅馴ならざるを恨み、修して以て今の名となす、亦知るべからざる也」

恕軒先生は「天羅麩」が外來語である事を知らなかつたらしいが、支那で古く肉類の油揚を「塔不剌(タアフラ)」と書いて居たのは蠻食の蠻語にあてはめたのであらう、「塔」を「テン」と發言した時代もあつたかさて此「テンプラ」の外來語であると云ふことに付、木村鷹太郎子

式に解する人が「テンプラとは、英語から出た語でテンプライである」と云つたが、「テン」の説明がない出鱈目の解である

大槻文彦先生は、其著『外來語源考』(學藝志林)及び『言海』に

「テンプラー語の姿と調理の趣とを考ふるに、洋語ならんと思はる、斯班牙語のテンプロ(寺)の料理の意ならむといふは、牽強か、或云、支那にて現に轉不稜(テンプラ)といふ是なりと、或云、油を天麩羅(アブラ)と記せるなりと、其他、山東京傳の天竺浪人云々の説など、尚多けれど、何れもいかゞ、魚介の肉を麪粉液(コロモ)に塗(マブ)して、胡麻の油にて煮(ア)げたるもの、魚肉の揚物(アゲモノ)」

明治四十二年一月『讀賣新聞』所載の「天麩羅の語源」中

「英語にテンペラなる語あり、第十五世紀頃まで伊太利畫家の使用せる繪具の稱にして卵白或は無花果の液等に色料を混合せるものなり、西班牙語にては之をテンプラと云ひ、拉典語より出でし混合物の意、或は攪拌するの意なり、故に往昔西班牙人が日本人の調理せるカキアゲを見て、饂飩粉に魚類を混合するもの、攪拌即ちカキまぜてアゲる物、即ちテンプラなりと云ひしに因るならん」

いづれにしても外來語である事だけは確實らしい

てんぷらの指をぎぼしへひんなすり　文政句「時代狂句選」

橋詰の露店でテンプラの立喰ひをする事であらう

白魚のてんぷらメリヤスをはめた美女　天保句

白魚の如き美人の手指に色物の莫大小手袋、相似たものとの見立

門徒とてんぷら肉食に衣を着　安政元年の「入船狂句合」

こんな狂句や「てんぷらへたかる近所の油蟲」の類は多いが省く

【二四】 アルヘイ

有平糖、砂糖を煮つめて練り固めた菓子、葡萄牙語のアルフエローの轉訛、アルヘイルを後にアルヘイと略し、金米糖と云ふに擬して有平糖と稱したのである

足利時代の末、吉利支丹の傳道者は、カステイラ、ボール、カルメラ、アルヘイ糖、コンペイ糖などを、人々に與へて手なつけしと云ふこと『太閤記』の凡例中にある

天保頃の『守貞漫稿』には「有平は專ら種々の形を手造りにせしものなりしが、後には鎔製す、白砂糖を練り鎔形に入れて燒き、後に筆刷毛にて彩色を施し、鮒、鯉、金魚、筍、その他種々の形を製す、金花糖ともいふ」とある

此「アルヘイ」には名句がない、『柳樽』第二十二篇に「三めぐりの御留守にあるへい紛失」といふ句がある、何の事か不可解

文化十年の『誹諧觴』第二十一に「まさ目に破れるアルヘイの縞」といふ短句がある、四角の扁平な物に線があつて、其線間にダンダラ幕の如く、赤と白とか、青と黄とかの縞目を附けたアルヘイもあつたらしい

あるへいをやればはにかむ芽花賣
あるへいの出來たて飴と情を張り

天保三年の『芽出し柳』所載の狂句「あるへいの蕨伯夷に脾肝の子」蕨形のアルヘイは今もある、首陽山にかけた事

【二五】 カステイラ

鷄卵と砂糖とを小麥の粉にまぜて蒸燒きにした菓子、故に「卵糖」とも稱した、葡萄牙語のカステーラ

新井白石の『西洋紀聞』に「カステイラと申すは、イタリヤなど聞こえし地に近き國にて、むかし其國にて作り出せし果子の、此土に傳へし物は、今も候なる」とあり、又「カステイリヤーカステイラともいふ、漢に譯して加西郎（キヤスイラン）といふ、昔我國に聞こえしカステアンといふこれなり、イスパニヤの東南にありて、共にこれ與國なりといふ」とあり、カステイラとは元來は國名であつて、カステイラ、ボーロと云つた略稱である、然らば其國は何處かと云ふに、葡萄牙人は西班牙をカステラと稱し、西班牙人をカステラ人と呼んだと云ふが、『和漢三才圖會』には「以西巴爾亞（イスパニア）（西班牙）保留止賀留（ホルトガル）（葡萄牙）加須底羅（カステラ）、同國の異名、南蠻也」とある、此葡國混入は誤りで、スペインの一部の州名であつたらしい

此「カステラ」ボール「我國にては、其製法長崎に入りて京坂に傳はり、更に江戸に及びて今日に至れり、製造者の嚆矢は、長崎にては本博多町の和泉屋長鶴本店並に其出店、京都にては五條烏丸西へ入る一文字屋忠兵衛、江戸にては日本橋吳服町の島屋嘉七なりと云ふ」と『日本外來語辭典』にある

かすてらとなれば玉子も僧の菓子　享保十八年の「誹諧長ふくべ」

『時代狂句選』には、此句の「僧」を「寺」にしてある、いづれにしても、鷄卵は肉食の一、非精進物とされて居るが「卵糖」にすれば構はないとの義である

【二六】 ミイラ

下等動物又は人間の屍體が物理的關係又は化學的加工によつて、凝固物に化し、永久に其形體を存する物を云ふのである、阿蘭陀語ではモミア、又はマミイと稱したが、「ミイラ」とは亞剌比亞語の「ミーリヤ」の轉訛なりとの說がある、支那で「木乃伊」と書くのは「マミイ」を誤つて「木乃伊（モノイ）」と譯したのであると云ふ

「化石谷」といふが如き、地質や空氣の關係で屍體が固形物に化した天然物もあるさうだが、近世は屍體に藥劑を塗つて其腐敗を防ぎ久く乾燥せしめる人工的のミイラが出來るのである

冷飯のみいらは灸の時に出し　天保三年の「武藏野六士撰」

殘飯を日に乾し、其乾飯を炒つて砂糖をかけた物、乾飯を「冷飯のミイラ」と見立てたのは面白い、『古今前句集』には此狂句の「は」が「を」になつて居る

いさぎよく乘出すやつはみいら取　「柳樽」三十八篇

番頭がやう〳〵みゐらとりおゝせ　「古今前句集」

此第一句は、若旦那が吉原で流連して歸らないのを、主人の命で呼戻しに行く雇人が、勇んで猪牙舟に乘るとの義、第二句は、其迎ひに行つた者が、若旦那と共に遊んで同く歸つて來ないのを再度の使者として番頭が出かけ、ヤツト兩人を連れ歸るといふ事

此兩句は「ミイラ取がミイラに成る」といふ俚諺によつたのであるが其俚諺の事を爲永春水の『閑窓瑣談』に左の如く記してある

「古くより俚俗の諺に木乃伊取が木乃伊に成るといふたとへを常々いひ傳ふ、其起源を奈何にと尋ぬれば、木乃伊の出る國は

赤道の下にあたる國にて、極熱の地方なり、其所にいと廣々たる砂地あり、其邊を往來する人は、土にてこしらへたる車にて過ぐることなり、萬一誤つて地に落れば、忽ち焦げて木乃伊と成る、又其木乃伊を取らんとて、土車に乘つて行く者あり、其者も乘つたる車が破れるか、崩れて地に落つれば、同じく木乃伊に成るといふ、是れ全く據なき妄說なり」

西鶴の『大矢數』に「砂の岑木乃伊に月の照添て」といふ誹句があるのは、右の俗諺に據つた句であらう

此「ミイラ」を原料として製したといふ詐欺的賣藥、何か二三の藥種を松脂で煉り固めたやうな物が、正保慶安の頃、諸病に奇効ありとして江戸で大に流行し、上下一般誰買はぬ者なき狀態であつたといふ事が新見正朝の『昔々物語』に出て居る

【二七】 アンポンタン

〔和漢古諺〕或云、あんぽんたんは西南海の蠻國の名にてもあるべし、六七十年ばかり以前、漂船長崎に滯留す、其人言語不通、愚痴なりしかば、其比の流行語に、人を輕侮してあんぽんたんと云ひしとも聞こゆと、巴旦國へ落ちしと云ふ俗語に似たり、巴旦國へ落ちたと云ふは、ばたんと落るに近く、あんぽんたんは、あほうに近し　（俚言集覽）

『通航一覽』か何かで「アンポン國」といふ國名を書いてあるのを見た、アンポンタンは國名であらう

馬鹿も海あんぽんたんも海で出來　「柳樽」三十九篇

「バカ」といふ海の貝、又海魚の「カサゴ」を一名アンポンタンと稱

した事を云ふのであらう、安本丹は馬鹿の類語

間男と亭主あんぽんたんで呑み　「柳樽」五十三篇

亭主が安本丹であつて、我女房を時々盗む間男と知らず、其間男と酒を呑むとの義であらう

【二八】　タバコ　キセル

日本語化して居るサラサ（更紗）、ラシャ（羅紗）、カッパ（合羽）、ラッパ（喇叭）、ボタン（釦）などは、外來語らしい感じがしないから、其句は多くあつても、悉く省くことにしたのである、其中のタバコ（煙草）とキセル（煙管）だけは、省いた語の代表として茲に記述する、兩者に關係する誹句柳句狂句は百數十もあらうが、單に二三句の引用に止めて置く

「タバコ」は葡萄牙語の「タバコ」そのまゝの稱である、我國へは慶長の初頃に葡人が持つて來たもので、其時からの名詞であるが、文字には漢名の「煙草」をあて、たまには「莨」の字を書く者もある大阪版の誹書や雜誹類には「南草」と書いて「たばこ」と訓してある

力入れて、お客の南草つぐ、ビンシヨ　文化十三年の「冠附の楽」

吹ちつて、南草上戸が泣く汐干　同

などの類である、此「南草」とは南蠻草の略であらう、『采覽異言』にはアロワカス國のセントヘンセンといふ島に始出烟草とあり、『近代飜譯西書』には、北亞墨利加洲の一部にタバコといふ島がある、三百五十年前イスパニア人のロマンバネといふ者、此島で初めて異草を得、タバコと名づけたのであると云ふ

此「タバコ」に關しては、古來の數多い雜書に種々の事が出て居る

煙草專門の書物にも伊勢貞丈の『煙草集說』、大槻玄澤の『蔫錄』、橘薫の『煙草百首』、煙草傳來記の『目さまし草』や『煙草記』があり戲作本にも『煙草二抄』、『煙器蛇話』があり、現實の『煙草栽培法』や『煙草製造術』などは幾十種もある

それから隨筆雜書の類で、煙草の傳來說、流行、禁止令、名稱、文字、器具、風俗、詩歌、俚諺、雜話等を載せてあるものは

安齋隨筆、燕石雜志、鹽尻、柳亭記、柳亭筆記、嬉遊笑覽、春波樓筆記、難波江、牛馬問、隨意錄、翁草、屠龍工隨筆、東厓談叢、茅窓漫錄、秉燭談、續昆陽漫錄、閑田次筆、我衣、世事百談、還魂紙料、塵塚談、八水隨筆、一話一言、理齋隨筆、提醒紀談、北峰雜集、麓の花、後は昔物語、尾花か本、雲萍雜志、思草、箔庭雜考、半日閑話、親子草、賤の小手卷、足薪翁記、慶

阿蘭陀人

タバコをすふ

明和七年大阪版

繪本國見山

長日記、當代記、羅山文集、長澤聞書、江都鑑、無顯隨筆、近世奇跡考、和漢三才圖會、倭訓栞、俚言集覽

此外繪本讀本戲作本等にある煙草に關する風俗上の繪畫、煙草入キセル、煙草盆等の沿革、古文書に現はれた制度上の記事等を總合歷叙し、併せて衛生上の利害論などを記述したならば立派な

日本煙草史　全何冊

といふ珍書が出來得ると思つて居る、そんな材料豐富、奇談珍話の多い中から「きかぬものタバコ法度に錢法度、玉の御聲に玄澤の醫者」とかいふ慶長の落首、目付の乞食が煙草をすッて居たのを見て、煙草の禁令を解いたと云ふが如き小話の二三くらゐを玆に記述したとて、それは九牛の一毛に過ぎない、それよりか、西洋ダネを玆に一つ紹介して置く

編者は我國の新聞雜誌に出た煙草に關する記事をも、數年來切拔いて保存して居るが、其中に大正六年發行の『中外新論』に出た林田雲梯子の「煙草哲學」といふ一文がある、其一節

「ドクトル、ヴルーデン氏は煙草傳播の歷史に就て、其勢力の偉大なりしを說いていふ、西班牙の航海者が千五百八十六年米國に往つての歸りに煙草といふものを持來り、之を喫して見せた時に、世人は如何にも不思議な事をすると怪んだものであつた、然るに此怪い風俗が非常の勢を以て四方に傳播して瞬く間に誰彼共煙草を口にせぬ者は無いようになつた、そこで英國のゼームス一世は、此惡習慣の感染を憂慮し、當時有名の文學者をして『煙草の害』といふ冊子を著述頒布させたが、結局何等の

効もなかつた、又法王ウルバン八世は、煙草を吸ふは敎會の規定に反すと云つて威喝したが、是亦無効に終つた、土耳古では喫煙者を罰するに、煙管を鼻の中に挿込むの刑を以てし、露國皇帝は喫煙者を苦刑に處した、其他歐洲各國何れも所罰に寛嚴はあつても禁遏に熱中せぬ國はなかつた、亞非利加のアビシニヤ國では喫煙の罪至つて重く、犯す者は鼻及唇を削ぐの刑に處した、支那でも明の崇禎十六年に禁煙令が布かれて、犯す者は斬首の刑に處せられた、我國(日本)でも是等諸國の例に洩れず煙草に對して種々の禁令が發せられた(云々省略)

慣れては自ら其善惡を失す、煙草の流行當初に於て各國共に以上の禁煙令が出た事は、吾々の見逃す可らざる現象である、西人曰く、物を評し人を評するには初見に於てすべしと、今の所謂第一印象批評とかを謂ふもの、煙草に對する各國の第一印象は如上軌を一にして禁煙令の布行を觀ざることなきは、忘れてはならぬ事であらう」

禁煙主義のヤカマシイ結論である、さて「タバコ」に關する柳句狂句は枚擧に遑なしであるが、其中の二句だけ

我物で煙草は人に强られる　マー一服おつけなさい

いきな土地煙草も手酌では呑まず　遊女の吸付タバコ

次に「キセル」、これも外來語、西班牙語の「管(クダ)」の義であるといふので「煙管」と書く、煙草渡來の當初には、キセルでなく紙に卷いて呑んだといふ說がある、それは舶來のキセルを持たなかッた者がした事であらう、雁首と吸口のあるキセルは煙草と共に輸入されたのである、豊臣秀吉は天正五年、工人に命じて「水口張」とい

ふ特製のキセルを拵へさせたが、民間では小竹の節を留めて火皿の大きさに切り、それに横穴をあけ、筆の軸に似た細い竹を通して吸つたさうである、後には金銀銅で造り、精巧な彫刻、象眼を加へたものも出來、明和安永時代の江戸通人、蕩樂息子などは、「銀キセル」に限られて居たので「贅澤をいひ〳〵廻す銀煙草」、「銚子への路銀にはらふ銀煙管」などいふ句が多い

此「キセル」の句も數十あるが、其中の二句だけ

長つ尻煙管が出たり這入つたり　歸りさうにするばかり

よくけなしなんすと煙管ふり上げる　遊女の妍憤

ヤレ〳〵これで本篇の終了、一服つけて後、次の「附錄」にとりかゝりませう

【附錄】　外來語擬似狂句

マネルといふことは人類と猿類の特有性であるが、滑稽的に擬似することは、笑ふ動物といふ人類に限られ居る、其擬似語入りの狂句をこゝに集錄する

▲アリンス國　フランス國、エグレス國などに擬して、江戸人が北國と呼んで居た遊廓吉原を、狂句作者がアリンス國と稱して居たのである、それは吉原遊女の特殊語に「そうでありんす」、「こうでありんす」などいふ言葉があつたに因る、委細は『一癖隨筆』の「アリンス國語辭彙」を見よ、又『川柳語彙』にも記してある

馬鹿らしうアリンス國の面白さ　アリンス國化物の住む所

アリンス國へ吹きつける雪見船　太鼓持アリンス國の通辭也

▲フルトキル　雨が降ると着るの義である「丸合羽和蘭陀の名はフルトキル」、これに類した語が多い

「乳呑子のあたま蘭名ネルトスル」、小兒が睡れば頭髪を剃るとの義、「腎の臓蘭語でいへばスルトヘル」、「スルトマルとはハランダの言葉なり」など駄洒落のバレ句も多い

饅頭をオストアンデル、袴をスワルトバートル、放屁をイキムトヘーデルなど云つた流行戯語に等しいことである、斯く語尾にルトを付けたのは、和蘭陀語のウエスト(西)ヘーメル(天)スワルト(黒)ワーテル(水)などに擬したのであらう

芋好きの名を阿蘭陀でオナラスウ　天保五年の「梅柳」

墮落狂句の一標本である、こんな下卑た淺薄の句が多いから、識者に侮蔑されて、柳句までが輕視されるに至つたのである

小泉迂外先生編述

古俳書に現はれたる外來語

完

（風俗志林所載）

廢姓外骨曰、此一篇は小泉迂外先生の執筆(未定稿)として、風俗研究會の機關雜誌、明治四十五年二月發行の、『風俗志林』第二卷第一號に掲出されたものであるが、今回其編輯兼發行者たりし富塚齊子に交渉して、特に轉載の承諾を得たものである、迂外先生が引用された誹句中には、予が川柳式の句として既に採錄せるものが六句がある(内三句は借用)、今二重として削除すべきことにもあらねば其まゝ存して置く

古俳書に現はれたる外來語

——未定稿——

小泉迂外

○私共が日常使用してゐる言葉の中には、支那や朝鮮は勿論、西洋諸國の言葉を其儘に採用したのが澤山ある。其中には多年使ひ慣らされて、知らずしらずの裡に日本の語格に合ふやうに變化してしまつて、ちよつと聽くと外來語だかなんだか解らないくらゐに日本化してしまつたのがある。

○列へば、タバコ(Tabaco)、ケット(Blanket)、パン(Pao)、シャツ(Shirt)、ミシン(Machine)、バケツ(Bucket)、などゝいふやうに(極く卑近の例であるが)、ちよつとして斯んなである。

○それで私共が多年取扱つて居る俳諧の上にも中々外來語が潜んで居る、今から見たならば或はつまらないとして一掃されてしまうかも知れぬが、文化の發達しない其當時に在つては、此舶來語を使用するといふ事は極めて面白く、型式に於てクラシックに捉はれたる俳諧に、如何にして新奇な材料を應用して、其音調との調和をとらふとした作者の苦心は、並大抵の事ではなかつたらうと察しる。

○今、古い俳書から順に紹介して見ると、慶安元年に出た貞室の『正章千句』には、

かたきもつ身のなと油斷なる

の附句に

黑船はるげれすの船のあひ近み

とある。るげれすは英吉利の事で、此時代の發音では斯く言つて通用されたのであらう。

枕上の時計に夢をさまされて

南蠻人の月をみるさま

此時計は今日使用されてゐる精巧なものではなく、信長時代に彼の南蠻から渡來した、水時計、砂時計等の類で、極く單純な機械である事は誰れも知つて居やう。

○延寶時代では『江戸八百韻』(延寶六年)に、

羅紗のやうなる黑雲の月　安昌

の短句がある。此の羅紗は葡萄牙から輸入されたもので、葡語では raśha 或は raisha と發音される。

一體葡萄牙は我天文十一年に他に卒先して渡來し、元龜二年長崎

に定航して貿易を開いたといふ、極めて古い歴史があるので、自然其國語が早くから傳播したので、從つて俳諧にも、此國と和蘭の言葉が最も多く使はれてゐる。

○西鶴の『五百韻』（延寶七年版）には、

一座をいたす阿蘭陀が宿　　西吟

の短句がある。

和蘭は葡萄牙に次いで古くから我國と交際があつたので、慶長十四年には平戸に商館を設けたくらひである。阿蘭陀が宿どいふのは蘭人が來舶して泊る宿をさしたのであるが、爰に現はしたのは思ふに彼の江戸本石町の長崎屋源兵衛を指したのではあるまいか時代は少し下るが享保十八年版の『名物鹿子』に「阿蘭陀宿」と題して和蘭人二人立てゐるところを畫き、

紅毛やおのが巣となる長崎屋　　壽尺

といふ句が題されてある。

和蘭人が渡來については、阿蘭陀下り、或は阿蘭陀渡として季寄にまで載せられてある。詞友朱明梓石兩君が著した『俳諧辭典』には、

阿蘭陀下。阿蘭陀渡　（春）

徳川時代に蘭人の來朝するをいふ、毎年七月頃入津し、九月十九日前年の來朝者發船す、當年の來津者は翌年正月十五日に貢物を持して江戸に赴き、幕府に出頭し四五月頃長崎に歸り、又新船の入津を待つ、

阿蘭陀は桑名過ぎたり春の風　　瓦松

と説明されてある。

○『雨吟一日千句』（延寶七年版）には、

黒砂糖たから成たる中よりも　友雪

其俵を見れば　羊羹　西鶴

の付句が見える。此黒砂糖も延享頃になると内地でも製造されたやうだが、當時はやはり輸入ものので、從て羊羹の如き菓子は、西鶴時代には極めてハイカラであつたと考へられる。

其他同書には、

物縫に磁石の針やめくるらん　友雪

○

横雲は天鵞絨にたとへ朝日和　友雪

などの付句もある。

此磁石も南蠻あたりからの渡來もので、兒來也の狂言にも小道具で使ふのが其れである。先頃も明治座で『鐵』を演じた際、忍びの者が天井から磁石を抱へて飛び下りる仕草があつたが、其當時此小道具の磁石につき、それは羅針盤であるの、いや磁石であるのと大分議論があつたが、要するに極く昔は羅針盤も或は磁石と稱へて一般に通じたのではなからうかとも思はれる。

天鵞絨は原名 Veludo で、慶安二年に京都から和製の模造品が織出されたが、原とは葡萄牙から輸入された織物である。

○言水の『江戸辨慶』（延寶八年版）には、

アンペラヤ雪を折敷く夕涼　申笑

内袖の羅紗やしくれて村艶　青雲

などの句がある、アンペラは當時舶來の莚として、頗る好事家に珍重されたので、今のやうに決して冷遇は受けて居らぬものと見

える。

○檀林から正風に遷つて、一旗幟を飜した天和時代の芭蕉が作には、

紅毛も花に來にけり馬に鞍
雪の日や羅紗羽織にたゝき鞘
ほし鮭や何がし殿は毛唐人

などの奇趣あるものが見うけられる、此紅毛はオランダと讀むのである。羅紗の羽織は天和時代に流行の品で、當時の武士が如何に此舶來品を珍らしがつて歡迎したかゞ窺はれる。毛唐人は一般の西洋人を指して斯く稱へたので、後世轉じて嘲罵する意味の名詞になつたが、當時は支那人を指して一に南京人と呼んだと均しい格である。

○其角編の『虛栗』(天和三年版)には、

ほとゝぎす羅紗の毛衣かへしけん　松緑
富士の月戎には見せし遠目鏡　疎音

の外、付合に

骨牌を飛鳥川に流しつ　其角

がある。

遠目鏡は乃ち望遠鏡の事で、享祿二年足利義晴時代に印度の使者が周防に渡來して傳へたのであつて、其後元和頃に彼の濱田彌兵衛が葡萄牙から傳習して作り初めたともいつてゐる。戎とはエゾと讀んで一般の外國人を冷罵して當時斯く稱へたのである。

骨牌は Carta でやはり葡萄牙から渡來した品で、天和元祿時代には此遊戯が盛んに行はれて一種の博奕と變じたので、遂に後に

は此禁令さへ出たくらひである。

○『新山家』（貞享二年版）の付句に、

短くと輕袗好むさうぶ革　　闇梅

といふ短句があるが、此のカルサンも葡萄牙語の所謂 Kalsan であ
る。當時は半ズボンの類であつたが、後には、タッツケ袴のやう
に變化した。

○『新三百韻』（元祿三年版）の付合には、

合羽破れて身はこゝえぬる　　信德

の短句がある。此合羽も葡語 Capa でやはり輸入品である。
嬉遊笑覽には、『今の合羽は慶長の頃、紅毛人の衣服袖も無く、
裾ひろき、カッパといへる物を學びて紙もて作り、油ひきてカッ
パと名付く』とある。

當時（元祿頃）は此合羽が珍らしいと見えて、例のハイカラがり
の其角の如きは、

合羽着て鹿のすがるや秋葉道
ふき降の合羽にそよぐ御祓かな
合羽着て友となるべき田植かな
青漆を雪の裾野や丸合羽

などの外、『錦繡緞』（元祿十年版）に、

合羽そろひて足かるき雨

の付句もある。

○『猿簑』（元祿四年版）の付合に、

はき心よきメリヤスの足袋　　凡兆

といふ有名な短句があるが、此メリヤスも葡萄牙語の meys で當

時のメリヤス足袋はハイカラ品で定めて珍重された事であらう。

○『七車』(元祿七年版)の付合に、

忘れては精進落るカステイイラ　介我

といふのがあるがカステラは慶長、元和の頃乃ち外國貿易が盛んに行はれた際、金米糖、アルヘイ糖、カルメラ、ボール、ハルテイ等と共に輸入された所謂南蠻菓子で、西班牙の地名 Castilla に起原して、例の Castcel Brood 略語だともいひ、或は葡萄牙語の Kastella とも傳へられてゐる。

○『東潮獨吟披露集』(元祿七年版)にある、

ボウブラや夜分の糸の置心　蔦莧

のボーブラは南瓜の事で、葡語の Abobura が轉化したのである。外來語ではないが同書に、

阿蘭陀通辭とかくあつさり　朝叟

といふ付句が見えるが、着想がハイカラ臭く、通譯を通辭といふやうに言ふのは、元祿時代の言葉と見えて頗る面白い。

○『むつちどり集』(元祿十年版)に、

イスぬく骨牌けふも暮しつ　神叔

といふ付合の短句があるが、前にもいつた如く當時流行の雲スー骨牌を詠んだので、今日も暮しつで當時の風俗が目睹するやうである。

○『續猿みの』(元祿十一年版)に、

天鵝毛の財布さがして年のくれ　惟然

の句がある。前にも言つたが當時天鵝毛の財布は舶來品若くは贅澤品としてとり扱はれたので、作者が當時洒脫を以つて有名な、

風羅念佛の惟然坊だけに更に興味を以て説明されやう。

○『水ひらめ集』（元祿十一年版）にある、

頬ふくらかに佐羅紗吹く葭　　常陽

のサラサはやはり葡語のSarasaで、今でこそ、どんな場末の呉服店にも、店頭に此の衣を見ない事はないが、當時は舶來物として貴ばれた布類であつたらしい。

○『のぼり鶴』（寳永元年版）に、外來語ではないが、

秋は此のこゝろのゆかぬ外羯鉄　　嵐雪

といふ句が見えるが、何んとなくハイカラ趣味があつて當時の句としては珍らしく思はれる。

○『名物鹿子』（享保十八年版）に、

芭蕉膏藥

芭蕉膏藥

享保十八年版　江戸名物鹿子

阿蘭陀の鋏づかひや破れ芭蕉　　榮峨

といふのがあるが、此句も外科鋏の句として新らしい趣向である

○享保十四年に南與乃ち今の佛領交趾から象が渡來し同年五月廿五日勇姿を江戸に現はしたが

天竺の常夏かくや水くらひ　　沾州

大象の傾城あゆみ暑さ哉　　青峨

ぐらひの平々凡々たるもの計りで、此舶來品に對するハイカラな新調は一つも試みられなかつた。

○桑岡貞佐撰の『名物鹿子』（享保十八年版）は前にも屢々引いたが、同書は當時の風俗を見るのに至便な俳書である。西洋酒の瓶に異人館を畫ける、レッテルを貼つたものを描き、

鐵砲丁名酒　　香國

紅毛が枕の鐘やわたり酒

などの新らしい句が見える。

○『節文集』（享保十八年版）には、

繻子、純子中に裸や土用干　　童平

の奇拔な發句の外、付合に、

馴れぬ純子の夜目に寢はぐれ　　童平

の短句がある。

繻子、純子もやはり舶來品で、純子等は今でも贅澤な織物として珍重されてゐる。近松巢林子の『博多小女郎波枕』に彼の毛剃が豪奢を描き、

「四郎左、子供は幾人ある。娘一人、男が二人御座りまする。ヲヽ、好い子持、小さけれども此珊瑚樹、對で秤目が八匁、二人の

子に提さしやれ、お娘が着る物に有合せた緞子三本、繻子五本、此緋縮緬裏に好からう、綿の代まで相添て、投げ出す、擲り出す頂くに、亭主が腕ぞ草臥ける。四郎左衛門恂として御禮より先づ膽が潰る、何時の間に此様な大富限者に御成なされた」といふ文句がある。尙俳人呑鯨が祖父茨木屋幸齋の如きは緞子大盡といふ異名があるなど、いかに當時緞子が持囃されたかゞ分らう。

○天明時代の俳人には期待した程外來語を用ゐてない。

蕪村には、

硝子(ビイドロ)の魚おどろきぬ今朝の秋
ビードロやこれも籟(フキモノ)秋の風

三井寺に緞子の夜具や後の月

小田原で合羽買ひけり五月雨

の四句より無い。ビードロは葡語の Vidro で、今の硝子に似て、しかももつと丈夫に吹かれて當時は珍らしい唐物として輸入されたのである。

○蓼太が『武藏野三吟』には、

天鵝絨に十年の工夫織おほせ　蓼太

『五車反古』に

木綿合羽をかろく打着て　道立

の付句がある。

○大江丸が『誹諧袋』(享和元年版)には、

親の代の時計つくろふ卯月哉　大江丸
バテレンの本尊かけたか杜宇　同

の發句に、俳諧の付句としては、

紅毛が船のたかどのきらめきて　不二

紅毛人のおも長な顔　大江丸

ジャガタラの糸のほつれの物憂さに　同

等がある。

バテレンは葡語のPadreで普通宣教師と譯すべきであるが、轉じてバテレン宗とか、邪宗とかに解釋されてしまつた。和蘭が船の句は、きらめきてでよく和蘭船の形容を言盡してある。面長な顔とは俗に和蘭の馬面（ウマヅラ）といふ詞があつたやうに、如何にも妙を極めてゐる。ジャガタラは今日いふジャガ芋で、原と西班牙からバタビヤに移植し、更に他の舶來品と共に輸入されたのである。

大江丸のやうな八十餘歳の老人から斯くの如き新奇な句を得たのは意外であつた。

○抱一上人の『屠龍句藻』（寛政より文政に亙る自筆本）には、

あぢさゐやビードロ吹が椽の先

夕立や右往左往の合羽籠

とし〳〵や御祓に捨る烟草入

春雨やカルタの鬼も綱が手に

炭竈のおのが火皿や新タバコ

ビードロの午を貢や桃の庭

一粒の粟也月のオロシヤ船

御厩の駱駝に附ん年のくれ

の數首がある。ビードロは蕪村の條にも述たが、之れを口にして吹くのは當時の風俗の一として見られる。煙草は今では純粋の日

本語のやうに馴化したが、實は葡語の Tabaku で、原產地は亞米利加フロリダ近海のタバコ島で、後に歐羅巴に移し、天正の初年に和蘭人か葡萄牙人かゞ長崎に輸入したのである。駱駝は當時舶來の動物として嘸ぞ珍らしかつたのであらう。オロシヤ船は露西亞船で、當時(文化)屢々露船が我沿海を掠め、或は威喝的に通商を迫つたり、其中には又高田屋嘉兵衛等の騷動があつたりして、兎角人心が露艦を恐れたうちに、きかぬ氣の上人は、何の毛唐人メラと一粒の粟にたとへて、罵り飛ばしたのであるが、斯かる所にも江戸兒的の性格が顯はれるといふのは寔に面白いと思ふ。

○言殘したが、伽羅も外來語の一種と見れば未だいろ〳〵ある。元祿初期の連句でミーラーといふ文字を見て非常に新らしい付句だと思つた事があつたが、今一寸其書名が考へ出せないので說明しかねる。

(明治四十五年二月六日記)

以上が其全文である、文章を一字一句も訂正しないは勿論、『風俗志林』所載の活字中に誤字ではないかと思ふ所が二三あつたけれども、それさへ原文のまゝにして置いた、但し誤句の誤字は原本に據つて訂正した所が二三ある

コ 79

大正十三年八月下旬印刷
大正十三年九月一日發行

〔川柳叢書〕 川柳や狂句に見えた外來語 定價 金壹圓

（不許複製）

編輯兼發行者 東京市下谷區上野櫻木町二十二番地 （宮武）外骨

印刷者 東京市本郷區動坂町三百十七番地 明正舍 小國直太郎

發行所 東京市下谷區上野櫻木町二十二番地 半狂堂
電話下谷六五九〇番
振替東京三九四二〇番

66
258

66
258 12

終